

## 〔 病 ・ 虫 害 発 生 概 況 〕

## 〔 病 害 〕

## 麦 類 病 害

2月～5月の低温、多照、小雨のため小さび病、赤さび病、黒さび病はいずれも発生がおくれ、平年にくらべて少発生であった。黄さび病は長崎、宮崎でわずかに発生がみられたにすぎなかった。うどんこ病、赤かび病も発生がおくれ、初発後4月～5月の多照、少雨のため病勢が進展せず全般的に少発生であった。その他の病害として大麦縞萎縮病の発生したところがあった。

## 稲 病 害

葉いもち病は、4月～6月の多照小雨のため早期、早植栽培では発生少であったが、6月下旬～7月の雨天続きのため、佐賀山間部、長崎の五島、杵岐、対馬、県北部、熊本、宮崎の沿海高台、霧島台地、鹿児島で発生が多く、普通栽培では苗代期の多照少雨により苗いもち病の発生は少で本田持込みが少なかったが、6月下旬～7月中旬の長雨のために全般的に発生し、例年は7月下旬～8月上旬で停滞する病勢がその後の天候不良のため進展して多発生となった。特に福岡、佐賀の一部、熊本の山間山麓地帯、球摩、長崎の西彼杵、県北部、五島、杵岐、対馬で局部的に激発をみた。穂いもち病は9月中旬の乳熟期から登熟期にかけて気温低く、日照不足と多雨のため全般的に発生が多かった。特に長崎の西彼杵、五島、宮崎の山間地帯、鹿児島の一部では早期、早植栽培に発生が多く、普通栽培でも局部的に激しい発生をみた。白葉枯病の発生は少であったが、苗代末期から本田初期にかけて豪雨による浸冠水および8月下旬～9月の台風の影響により福岡の一部、長崎の志佐川流域、熊本の中山間地帯特に阿蘇谷、大分の県北部、宮崎の山間地帯で多発し、鹿児島では9月下旬の台風16号による塩風害による枯れ上りと同時に発病が進展した。紋枯病は7月の気温が低い

ため全般的に少発生であったが、早期栽培では長崎の五島、鹿児島鹿屋、指宿、普通栽培では福岡の一部の山間地帯に発生が多いところがあった。ごま葉枯病は少発生であったが、大分の沿海砂質田や湿田に多発したところがあった。小粒菌核病は発生が少なかった。網斑病は7月、8月の日照不足、低温のため大分で発生が多かった。心枯線虫病は大分の西国東、南海部では平年を上まわる発生がみられた。ウイルス病では、萎縮病が福岡の県北部、長崎の西彼杵、鹿児島で発生が多く、縞葉枯病は福岡で局部的に発生した。黄萎病、くろすじ萎縮病は例年にくらべて少発生であった。

## そ の 他 の 病 害

菜種菌核病は発生が例年に比しておくれたため発生が少なく、馬鈴薯疫病は秋作で11月下旬～12月の高温、12月中～下旬の多雨、日照不足のため発生が多かった。甘藷黒斑病、甘藷黒痣病は発生がやや多かった。果樹ではカンキツ黒点病、カンキツ褐色腐敗病の発生が多かった。（九州農試環境第一部）

## 〔 虫 害 〕

昭和43年度には、九州全域にわたって異常発生した害虫はなかったが、地域的に多発生したのが見られた。

ニカメイチュウでは、全般的に、前年からの越冬幼虫の密度が高く、とくに北部九州ではマコモの中での越冬幼虫が多かった。第1回成虫の発生型の多峰化が目立った地域があり、防除期以降に発蛾のピークが見られ（佐賀、長崎、熊本、宮崎）、第1世代幼虫による被害が多かった。このような場合防除効果も劣り、ニカメイチュウの生存率も高く、第2回成虫の発蛾も多くなった。第2世代の被害も全般的には多ないし、平年であったが、地域によっては近年次第に発生が増加しつつあるといわれている（福

岡、宮崎、鹿児島)。この原因として、作季の混交、田植期の不斉一、施肥の後期、多量化などがあげられ、これに伴うニカメイチュウの生存率の増加、発生時期の多峰化が指摘されている。

セジロウンカの発生は全般的に少なく、とくに初期の異常飛来は殆んど見られなかった。被害は少なかった。トビイロウンカでは地域によっては平年並からそれ以上の初期飛来密度が見られ、稲作後期には坪枯れによる被害が見られた(佐賀、熊本、宮崎、鹿児島)。

ヒメトビウンカの発生は越冬世代から平年並かやや少なく、それ以降もやや少な目に経過した。しかし、いね縞葉枯病は山間、山麓地帯に多発生し(福岡、熊本、大分)、とくに後期発病型が多かった。ツマグロヨコバイも北部九州では平年並かそれ以下の発生であった。黄萎病の発生は特に少なく、これは越冬世代の生存期間が短く、感染期間が短かった

ためと考えられた(佐賀、宮崎)。しかし、南部九州では、ツマグロヨコバイの防除が有効に行われた地方では、いね萎縮病の発生もよく抑えたが、その他の地方では発生多く、重要問題である。

最近2~3年大発生したコブノメイガは全体としては発生が少なかったが、鹿児島、南薩地帯では、予察燈による誘殺数も多く、発生も多かった。

この他、福岡ではイネクロカラバエが晩植田で多発生した。これは本田初期の低温に負うものと考えられた。長崎ではジャガイモガの発生が近年次第に広まりつゝあるといわれ、43年度も発生はやゝ多かった。鹿児島では、42年度局部的に発生したムギハムグリバエがビール麦に発生し、県下一円とくに南薩西部沿岸地帯で多発した。

ムギのアブラムシ類、キリウジ、ナカジロシタバなどの発生は概して少なかった。

(九州農試環境第一部)